

ヴォルガの古都ウーグリチ

畔上 明

ヨーロッパ最長の大河、ロシアの人々にとって「母なるヴォルガ」と親しみを籠めて呼ばれる大動脈の流れは、その川を辿っていくことで、波乱万丈なロシアの歴史の様々な姿が見えてきます。

ムソルグスキーの歌劇「ボリス・ゴドゥノフ」をご覧になったことはありませんか。プーシキンの戯曲を基とし、リューリック朝の終焉からロマノフ朝創設までの間の動乱時代(スムータ)、日本では江戸幕府の始まろうとする時期にツァーリとなったボリス・ゴドゥノフ(1552-1605)を描いたドラマです。

リューリック朝最後のツァーリとなったフョードル1世(1557-98)の義兄であるボリスが摂政として、先帝イワン4世(雷帝)の末っ子ドミートリー(1582-1591)が2歳の時その母マリア・ナガーヤと共に送り込んだ先がモスクワから北に240kmのヴォルガ畔りの古都ウーグリチでした。

時計工場「チャイカ」がありチーズ生産研究所があることから「ヴォルガのスイス」とも呼ばれるウーグリチですが、クローズ・アップされるのは16世紀末幼いドミートリー皇子が謎の死を遂げたことで歴史が動き出したと言えます。てんかんの発作を起こした際

ダーツ遊びに使っていたナイフが首に刺さってしまったという事故説、ボリス・ゴドゥノフ犯人説、刺客失敗説等々、事件調査をしたワシリー・シュイスキーが見解を何回も変えたこともあり時代によってその解釈が変化していきました。

歌劇では、ボリス・ゴドゥノフの陰謀によって死に至らしたと、その後実は生

きていたという偽のドミートリーが出現、ポーランド軍を引連れモスクワへ進軍してくることでボリスは死ぬ迄悩まされ続ける話となっています。

ウーグリチ・クレムリン(15-19世紀)の領域の中、ドミートリー皇子が7年間暮らした宮殿は15世紀末に建てられた当時のもの、北西ロシアの特徴であるレンガ装飾の建物の内部は現在ウーグリチ歴史美術館となっています。

3度も現れたという偽ドミートリーが僭称者であることを証明するため、ドミートリー皇子の遺骸が掘出され殉教者として聖人に列せられこととなりました。ドミートリーの死の現場は一世紀ののち1692年ピョートル大帝の命令により血の上の聖ドミートリー教会が建てられます。教会内部にはイタリア・ルネッサンスの壁画を思わせるフレスコ画が1772年に描かれ、ドミートリーの死について物語っています。

いかにもロシア的と思われるのは、ドミートリーの死を急報した教会の鐘が、その後の混乱を起こすきっかけとなったとして罰せられ、鐘を鳴らす舌を抜かれ、鞭打ちの刑を受け、シベリアへ送られ、19世紀末アレクサンドル3世の時代に戻されたということです。そして舌のないままの姿でこの教会内に展示されています。

15世紀の教会が建っていた場所には、1713年スバソ・ブレオブラジェンスキー大聖堂が建立されました。その内部には昔の教会の基礎が残されています。巨大なドーム内は柱が1本もなく、1860年に設けられた7段に及ぶイコン壁は美しく、聖堂内で歌われていた聖歌隊の澄んだ響きはいつまでも耳の奥に残るのでした。(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)



イリヤ・グラズノフ (1930-2017) 画集より「皇子ドミートリー」

ウズベキスタン便り

寺尾 千之

7月号では、大崎さん発案のインターン制度を紹介しました。一方、日本では、'01年6月から、事務局のある流山市を中心にウズベキスタン紹介活動が展開されて行きます。当時「県立流山青年の家」では「国際交流・文化活動発表・模擬店などを通した明るい地域づくり」をテーマに、年2回、約3000名が参加する流山フェスティバルを開催していました。このフェスタ実行委員長が、当時、私がコピーのため頻りに利用していたコンビニのオーナーでした。その彼が「フェスタでウズベクブースを用意できるよ」と声をかけてくれたのです。この予期せぬ幸運に力が入らない訳がありません。早速、松戸の記者クラブに出向き「日本初ウズベキスタン紹介です」と情報提供、三大紙地方版と地元紙にフェスタ開催予告記事が掲載されます。当日の6月3日には数十人が開店前からウズベクブース前に並ぶほどの人気になりました。カラフルな民族衣装と青いリシタン陶器が醸し出すエキゾチックな雰囲気(写真ご参照)が、更に多くの人々を惹きつけていきます。写真左下の封蝋(ふうろう)された荷物には、有名陶芸家の直径15cm、30cm、40cmのプレート、子ども達が作った箸置き、30cm四方の手織り椅子マット等が入っていました。午前中にそれら品々は完売され、売り上げの6万余円全額を学級に寄付することができました。フェスタは'05年の「つくばエキスポ」開業に伴



い、'04年11月で終了しますが、毎回売り上げ全額を学級に寄付することができました。大崎さんご夫妻は、8回のうち3回も応援に駆けつけてくださいました。

素晴らしい出会いもありました。学級から託された民芸品を何箱分もメンバー30人で手分けして届けてくれたシルクロードを自転車で走破するグループ「地球と話す会」、「日本語ボランティア講師募集」の大きな看板をブース前に設置してくれた流山市教育委員会、写真展示でウズベキスタンの魅力を伝えた写真家、海外での日本語教育に関心の高い元大使ご夫妻、ウズベキスタン大使館書記官、都内や福島を拠点に友好交流を進めていた諸団体のメンバー、HP作成や留学生のホストファミリーを名乗り出た地元住民、留学生とウズベクピラフの料理教室を主宰したホストファミリー、ウズベクダンス、ベリーダンス、バリダンス、小田原甲冑隊の武士の舞、ウズベク民話の紙芝居の披露などなど、惜しみなく得意技を披露してくれたボランティアの多彩さには心底驚いたものでした。

時代は移り、ガニシエル校長がSNSを駆使して舞鶴市など諸団体と独自に交流を継続していますが、約20年前のフェスタでのダイナミックな草の根交流が学級の活動基盤を構築したことに間違いはないと、百枚に及ぶフェスタ写真に写るサポーターの顔を一人ずつ眺めながら改めて感じ入っています。

(リシタン・ジャパンセンター事務局長)